

1 単元名

大日本帝国の行く末を辿る ～二度の大戦から私たちは何を学ぶのか～

2 単元について

本単元は、中学校学習指導要領の「歴史的分野 C 近現代の日本と世界 (1)近代の日本と世界 (カ) 第二次世界大戦と人類への惨禍」を取り扱う。本単元を通じて、生徒が軍部の台頭から第二次世界大戦終結に至るまでの日本の政治外交の動きと、大戦が人類全体に及ぼした惨禍について、多面的・多角的に考察し、表現する力を育成することをねらいとする。

現代社会は、情報化やグローバル化の影響を受け、今もなお急激な変化を続けており、人々の持つ多様な価値観もまた変化し続けている。一方で国際社会では、トランプ政権の保護貿易政策やロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区における戦闘など、異なる価値観の対立に起因する様々な問題が生じている。また、地球環境問題に代表されるように、様々な利害を抱える国同士が協調して取り組むべき課題も山積している。わが国においても少子高齢化が進み、社会保障政策の在り方を巡っては、子育て世代と非子育て世代、高齢世代と現役世代といった世代間で意見の対立が見られるほか、SNS などのソーシャルメディア上では日々個人間の論争が発生している。さらに、外国籍の人々などに対して一方的な攻撃を加えるヘイトスピーチも近年問題となっており、2016（平成 28）年にはヘイトスピーチ解消法が施行された。このような社会情勢を踏まえると、現代においては、多様な価値観を持つ人々が共存していくために、広い視野から諸課題に取り組む力を持つことがより一層重要になってくるだろう。このように、現代社会では多くの対立が生じ、異なる価値観同士がいつ衝突してもおかしくない時代を私たちは生きている。予測困難な現代社会において、多様な価値観を持つ人々が共生していくためには、歴史から学び、その教訓を現代社会に活かす、主体的に課題に取り組む力が不可欠であると考えられる。

明治維新を経て、近代化の第一歩を踏み出した日本は、富国強兵を推し進め、日清戦争、日露戦争に勝利を収める。しかし、この国家の近代化による成功体験は、アジアにおける新たな強国として日本という国家の意識を形成し、領土拡張と勢力圏確立という帝国主義的な目標へとつながっていく。

第一次世界大戦は、ヨーロッパ各国を中心とした列強同士の覇権争いであったが、極東の日本は傍観的な立場であった。その際日本は、アジアにおける影響力の拡大を試み、中国に対して二十一か条の要求を突きつける。この要求は日本の中国における経済的、政治的な権益を大幅に拡大する内容であったため、連合国側にも日本の帝国主義的な野心に強い警戒心を持つ国もいた。大戦終結後もヴェルサイユ体制において、日本の旧ドイツ権益の継承は認められたものの、二十一か条の要求は国際的な批判を浴び、日本の国際的な信用を損なう要因の一つとなった。

1929 年にアメリカを発端として発生した世界恐慌は、資本主義世界の経済に未曾有の危機をもたらし、日本も例外ではなかった。深刻な不況、失業者の拡大、農村の疲弊など、国内の社会不安が高まる中、日本の軍部、特に満州に権益を持つ関東軍は、事態を打開するために武力による満州支

配を強化する満州事変を 1931 年に引き起こした。国際的な平和維持機構である国際連盟は、調査団を派遣し、日本の行為を侵略と断定したため、日本政府は国際連盟の勧告を拒否し、1933 年に国際連盟を脱退するという措置をとることになる。

1930 年代後半、国際社会は、ヴェルサイユ体制の矛盾、世界恐慌の影響、そして全体主義国家の台頭という複合的な要因により、再び緊張を高めていた。ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニがそれぞれ権力を掌握し、領土拡張政策を推し進めており、国際連盟脱退後、国際的に孤立を深めていた日本は、これらの全体主義国家との連携を模索し、1940 年 9 月に日独伊三国同盟を締結することになる。日中戦争の長期化する中、アメリカからの経済制裁で苦しみ、資源獲得が困難になりつつあった日本にとっては、ヨーロッパにおいて勢力を拡大しているドイツやイタリアと同盟を結ぶことで、国際的な地位の向上やアメリカへの牽制を試みたものであった。しかしそれは連合国側から見ると、自由主義・民主主義国家と、全体主義国家との対立を示すものであり、世界大戦という大きな争いへと向かうための、大きな一歩となってしまっていた。

このように近代の歴史は、日本が近代化を成功させ、列強各国と並ぶ国力を身に付けていく中、国際協調という『共存』の道から、特定の国家目標達成を優先する『対立』の道へと移行行くさまが見て取れる。過去にあった様々な選択が、多くの人々の命を奪い、悲劇を生みだした事実がある。生徒には、過去の過ちから目を背けることなく学び、現代社会における平和の尊さ、国際協調の重要性などを再認識し、多様な他者との共生こそがこれからの社会を「よりよく生きる」ための大前提となっていることを、主体的に見出してほしいと願う。

上記のような目的を達成させるため、「なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのだろうか。-共存から対立への転換点を探る-」という問いをもとに理解を深められるよう本単元を構成する。単元導入では『共存』とは何かという共通認識を形成し、第 1 時から第 3 時を通史で行い、第一次世界大戦以降に起きた出来事についての知識の理解に努め、図表を用いながら、整理する。第 4 時から第 7 時を使い、授業者が用意した 4 つの出来事を選択し、なぜ日本が国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのか、その根源を「共存から対立への転換点」という視点から考察する。この考察を深めるため、特に重要な以下の 4 つの歴史的出来事を転換点として選択し、生徒に深く探究させる。

①世界恐慌（経済的対立の激化）：第一次世界大戦後の国際社会は、ヴェルサイユ体制や国際連盟の設立により、国際協調の道を歩もうとしていた。しかし、1929 年にアメリカで発生した世界恐慌は、その脆弱な国際経済システムに決定的な打撃を与えた。各国は自国の経済を守るため、保護貿易政策やブロック経済化へと傾倒し、自由な経済活動を通じた国際協調の基盤が崩壊した。この出来事は、経済的な繁栄が国際協調を支える土台となる一方で、経済的な危機が各国を「自国第一主義」へと向かわせ、やがて来る政治的・軍事的対立の火種となった「経済的転換点」として位置づけられる。

②満州事変（国際的な孤立）：世界恐慌によって国内の経済・社会不安が高まる中、日本は満州の権益を確保するために、国際的な合意に反して武力を行使し、満州国を建国した。これは、武力による現状変更を認めないという国際連盟の原則を日本が自ら破り、その結果、国際連盟からの脱退という形で国際社会からの孤立を決定づけた「外交的転換点」である。この出来事は、日本が国

際協調の枠組みから逸脱し、独自の道を歩み始めることの、象徴的な一歩となった。

③五・一五事件（軍部の台頭）：世界恐慌による経済的困窮や、満州事変以降の国際的な孤立に対する国民の不満、そして一部政治家の腐敗など、国内に鬱積した閉塞感を背景に、海軍青年将校らが政府要人を殺害するテロ事件を引き起こした。この事件は、議会政治の信頼を揺るがし、軍部の政治介入が公然と行われるようになった「国内政治の転換点」として重要である。軍部が国民の支持を集めながら、政治を主導する力を持つようになったことは、その後の日本の対外強硬路線を決定づける大きな要因となった。

④日米交渉（外交の決裂）：太平洋戦争の開戦を目前に控えた日米両国は、武力衝突を回避するための最後の外交交渉を行った。米国が提示した「ハル・ノート」は、日本にとって受け入れがたい中国からの撤兵や三国同盟からの離脱を要求するものであり、双方の国益が真っ向から衝突した。この交渉は、互いに譲れない国益を巡り、外交努力が最終的に決裂し、戦争という「対立」の選択肢が現実化した「最終的な外交的転換点」である。この交渉の決裂は、共存の道が完全に閉ざされ、避けがたい武力衝突へと至る決定的な一歩となった。

これらの4つの出来事を多面的・多角的に考察することで、生徒は、一連の歴史が「点」ではなく「線」でつながり、経済、政治、外交、軍事といった様々な要因が複雑に絡み合いながら、日本が国際協調から対立へと転換していった過程を深く理解することができる。同時に、過去の選択がもたらした結果から教訓を学び、現代社会における平和と国際協調の重要性を主体的に見出す力を育成する。第7時にはクラス全員で Google スライドにまとめた内容を共有し、気になるスライド内容があれば、各々質問ができるような時間を設定する。そして第7時の後半、「なぜ日本は共存から対立という道を選択したのか」「それぞれの選択は、歴史的に、また倫理的な観点からどのように評価されるべきか」について、生徒自身の中での最適解をスライドに記入する時間を設定する。そして第8時、第7時に作成したまとめを全体で共有し、近代の特色をまとめる作業を行い、「共存の道から対立の道に変わった転換点」「ヴェルサイユ体制の限界」など近代の特色を捉えさせたい。そして、今を生きる私たちが、現代に活かすべきことを振り返らせたい。

本校では探究ラボを活用した授業実践を行っている。他教科の例を挙げると、数学科では単元内自由進度学習を通じて、個別最適な学びの実現に取り組んでおり、探究ラボでは、他者の資料やアイデアを参考にしたり、コミュニケーションを通じて協働する場として活用している。本校社会科部会では、歴史的分野において、時代的特色を捉える際、個別に学習を追究し、他者の視点を取り入れながら自らの学びを深める場として活用したりしている。

また、本時では、変化の激しい現代社会を生きる生徒たちに生きた知識を身に付けさせるために個別最適な学びを取り入れている。また、生徒が近代における共存から対立へいたる事例を自ら選択し、スライドにまとめる活動を設定する中で、探究ラボを活用することで、生徒が学習方法を選択し、場合によっては自ら調整を行い、生徒同士で知識を補完、共有することで、学びを深めることをねらいとしている。その際、多岐にわたる資料や解釈が存在する近現代史を扱う難しさから、生徒が特定の思想に偏ったり、戦争を肯定するような解釈に流れたりしないよう、授業者は歴史的事実に基づき、多面的・多角的に考察させるための発問や資料提示を工夫し、個別最適な学びの充

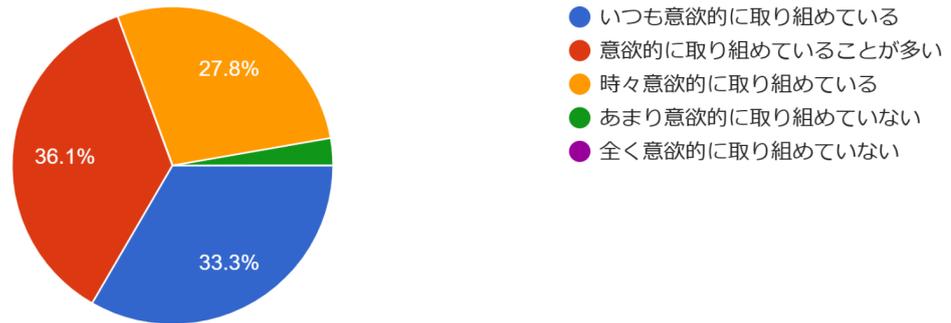
実を図る。これにより、生徒が多様な視点から考え、自らの意見を形成する力を育むとともに、平和の尊さを深く認識する機会としたい。

3 生徒の実態（3年C組 合計38名 男子18名 女子20名）

●生徒の実態に迫るためのアンケート（実施生徒数36名）

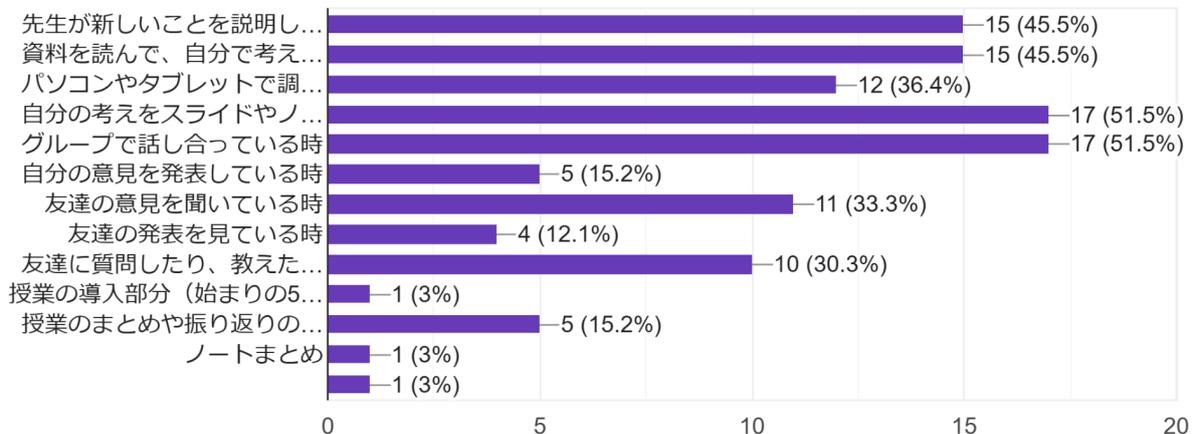
Q1：あなたは、普段の授業（全ての教科）で、どのくらい「自分の意思で意欲的に学習を行っている」と感じますか？

36件の回答



Q2：前問で「意欲的に学習を行っている」と回答した方は、どのような活動や時間帯にそう感じる人が多いですか？（当てはまるものを全て選んでください）

33件の回答



Q3：あなたが学習（特に歴史）に「興味・関心を持つ」のは、どのような時ですか？（自由記述）

① 学習における「興味・関心」の源泉

生徒が歴史学習に興味や関心を持つのは、主に以下の3つのタイプに集約される傾向が見られた。

◆「なぜ？」を追究する知的好奇心

「なぜそうなったのかの理由を知りたい時」「何かが起こったときに、どうしてそうなったのかを自分で調べる時」「複雑な政治家の心情を知ること」「続きが気になるとき」「理解が深まったとき」

◆現代や自分との「つながり」の発見

「今の自分達の世代に関係または続いていること」「これからの社会に役立つことや昔の人々の暮らしです。」「昔に行われたことや作られたものが現在も残っていたりするとわくわくします」「現代に近づいていると興味を持ってる」「今の日本になるまでの経緯がすごい面白い。」

◆「新しい発見」と「既有知識との接続」

「昔に起こった事や人を新しく知ったとき」「世界的に大きな出来事が起こったとき」「知っている人物や出来事が出た時」「知ってる名前が出てきた時」「自分がもともと少し知っている内容を詳しく取り上げているとき」「新しいことを教えてもらったとき」「現在と違った生活や文化を知った時」

これらの意見からは、生徒が単なる知識の羅列ではなく、歴史の因果関係や現代との連続性、そして新たな発見に学習意欲を見出す傾向があることが示唆された。

② 「主体的な学び」につながる活動への意欲

生徒が「自分の意思で意欲的に学習を行えている」と感じる場面として、「自分で調べる時」「自分で考える時」といった能動的な活動を挙げる声が複数見られた。また、他者との交流を通じて学びが深まる感覚も捉えられた。

「何かが起こったときに、どうしてそうなったのかを自分で調べる時」「友達とグループになって調べ学習をし、共有しながら学ぶ時。」「理解が深まったとき」

③ 本単元（近代史・戦争）への具体的な関心

特に「戦争」や「国が対立する状況」への関心が強く、その背景や経緯を知りたいという具体的な探究意欲が見られた。

「戦争のところを習ってるとき」「戦争や国的に悪くなったとき、どんな事があったのかが気になります。」「日本についての歴史が今は平和主義の日本だけど昔は戦争をどんどん仕掛けたりしていて、今の日本になるまでの経緯がすごい面白い。」「どのようにその国を侵略していったかを知れるとき」

Q4：今回の単元で学ぶ「近代の日本と世界」について、あなたが今、知っていることや興味があることはどんなことですか？（自由に記述してください）

①戦争の具体的な「経緯・内容」への関心が高い

- ・多くの生徒が「第二次世界大戦」「太平洋戦争」「戦争の作戦」「真珠湾」「原爆」など、戦争そのものの具体的な出来事や展開について知りたいという意欲を示している。
- ・「ヤルタ会談の実態」といった、国際的な取り決めや交渉に目を向ける意見も少数ですが見られる。

②「なぜそうなったのか」という「原因・背景」への探究心のある生徒がいる

- ・「世界恐慌になって日本は植民地などがなく土地を奪うしかなく争いをしていたら真珠湾に攻撃してしまいアメリカが起こって原爆を落とされた」といった、一連の出来事の因果関係を自分なりに捉えようとしている生徒がいる。
- ・「国同士で争っていたけど国際連盟をつくってみんなで手を取り合っていたら、第二次世界大戦の悲劇は回避できたんじゃないかと考えたりしてどうしてこの結果になったのかについてが興味ある内容。」というように、歴史の選択とその結果、もしもの可能性を考える深い視点を持つ生徒もいる。
- ・「日本がどうやって今の平和主義になったのか」という現代への連続性を意識した問いも含まれている。

③社会・文化・人々の「暮らし」や「心情」への関心

- ・「昔の人々の暮らし」「現在と違った生活や文化」「複雑な政治家の心情」といった、当時の人々の生活や感情に触れたいという声が見られる。
- ・「戦争の被害者のお話」といった、個々の体験や感情に寄り添う関心も伺える。

Q5：あなたは、今後どのような歴史の授業であれば、もっと「自分で学びたい」と思えるようになるとおもいますか？（自由記述）

①映像資料（動画）の有効性

多くの生徒が「動画」を学習の有効な手段として挙げ、その分かりやすさや興味喚起効果を高く評価している。

「動画を見るのがとてもわかりやすいから続けてほしい」「動画がわかりやすいから続けてほしい。」「戦争についての動画を見てるとき」「動画を見て学ぶのがわかりやすかったです」

②能動的な活動への期待

生徒は、受け身の学習だけでなく、自ら調べたり、考えたり、共有したりする活動に意欲を見せている。

「自分たちで調べて穴埋め的なやつ」「出来事が起こった原因とかを詳しくおしえてくれる」「人物についてくわしく調べる」「自分で考える時間も大事だけど友達や近くの人と共有する時間をもっと増やしたほうが記憶にも残るし、意見も深められて、楽しく授業ができると思う。」

③ 協働的な学びへの肯定的な声

他者との交流を通じて、より深い学びを望む声も複数見られた。

「話し合いを増やす」「まとめの発表をしあうなどワーク時間とるたのしい」「誰かと協力して調べる感じの授業」

④ ノート・板書形式への要望

一部の生徒からは、板書の重要性や、プリント学習における課題についての具体的な意見が寄せられた。これは、知識の定着方法に関する生徒のニーズを示す。

「プリントじゃなくて板書のほうがわかりやすいからそっちのほうが授業受けたくなる。プリントだと書きたいこと書くスペースないし、穴埋めするだけだから頭に入らない。あと無くす人いるから板書の方が良いと思います。」「板書(自分で好きなようにノートをまとめる)楽しい」

⑤ 個々の学習スタイルへの配慮

「自分が好きなのを見たとき」「自分の好きな歴史のところなど勉強する」といった、生徒個人の興味関心に基づいた学習の機会を求める声や、「先生があててこなかったら意欲的に学習に取り組める」といった心理的安全性の確保に関わる示唆も見られた。

#### 4 単元目標

- (1) 昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治外交の動きや欧米諸国の動きなどを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解する。  
(知識及び技能)
- (2) 近代における共存から対立への転換点や近代の時代的特色について、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現する。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 近代の時代的特色を、近代における共存から対立への転換点に関する複数の考えを比較・検討しながら、主体的に追究しようとする。(学びに向かう力、人間性等)

#### 5 目標達成のための手立て

現代社会において、安易な情報や偏った見解に流されず、自律的に判断し、他者と建設的に対話しながら多角的に物事を捉える力は、平和で民主的な社会の形成者として不可欠である。本単元では、この力を育むため、生徒一人ひとりが過去の出来事と真摯に向き合い、「学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く探究に取り組む主体的な学び」を何よりも重視していく。自ら見つけ、興味を持って進めた学習で得た知識こそが、個人の深いところに刻まれ、理解へと繋がる。したがって、本単元では個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指していく。

本単元では、「なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのだろうか。-共存から対立への転換点を探る-」という単元を貫く問いへの生徒自身の「最適解」を導き出し、多面的・多角的な歴史認識を形成することを目標としている。この目標達成のため、特に生徒が共通の課題を追求し、資料を吟味する中で、自身の考えを深める第4時から第7時における個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指した指導を展開する。具体的には、以下の手立てを通じて、生徒一人ひとりの学習状況に応じたきめ細やかな支援と、他者との対話を通じた学びの深化を図っていく。

##### (1) 個別最適な学びの充実

生徒が自ら選択した4つの出来事を基に Google スライドを作成する活動(第4時~第7時)においては、生徒一人ひとりの学習進度や理解度、興味関心に応じた学習の最適化を図る。これにより、生徒は与えられた課題をこなすだけでなく、主体的に学び方を調整し、深い考察へと向かうことができる。本時における具体的な手立ては以下の通りである。

#### ◆学習資料の個別化と段階的提示

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
生徒の基礎的な知識・理解度に応じて、複数の難易度の学習資料(例:基礎的な解説プリント、教科書・資料集の該当ページ、NHK for School)	資料を読んでも内容が理解できない、何から手をつけていいかわからない生徒がいる。	教員は、個別巡回や Google スライドへのコメントを通じて生徒のつまずきを早期に発見し、ミニレクチャー(補習)を適宜実施する。具体的には、特定の用語の解説や、資料の読み方のポイント(例:「誰

<p>の映像資料、より詳細な専門的解説)を用意し、生徒が選択できるようにする。また、必要に応じて教員が特定の生徒に適切な資料を提示する。</p>		<p>が」「いつ」「何を目的として」書いた資料か、事実と意見の区別など)を個別に指導する。また、「まずこの年表を見て、出来事の前後関係を整理してみよう」といった具体的なスモールステップを提示し、学習の足がかりを与える。</p>
--	--	---

◆探究活動のプロセス支援と思考ツールの活用

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
<p>生徒が「その出来事が起こった背景」「その出来事の結果」「共存から対立への転換点としての意味」を深く考察できるよう、思考の枠組みとなるスライドテンプレートを事前に提供する。また、単なる出来事の解説に終わらず、「なぜその選択をしたのか」「それが国際社会にどのような影響を与えたのか」といった、より深い問いを発問によって促す。</p>	<p>出来事の表面的な事実をまとめるだけで、深い考察に至らない生徒や、論理的な思考の展開に苦慮する生徒がいる。</p>	<p>教員は、生徒のスライドやワークシートの記述内容を詳細に確認し、個別指導において具体的な発問を行う。例えば、「この出来事の背景には、〇〇(世界恐慌など)がどのように影響したと思う?」「この日本の選択に対して、アメリカやイギリスでは当時どう反応したと思う?」といった問いかけを通じて、多面的・多角的な視点から思考を深めるよう促す。また、過去の優れたスライドの事例(匿名で)を共有し、考察を深めるためのヒントを与えることも有効である。</p>

◆歴史認識の偏りへの配慮と倫理的指導

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
<p>近現代史を扱う上で、生徒が特定の思想に偏ったり、戦争を肯定するような解釈に流れたりしないよう、教員は細心の注意を払う。生徒が選択した出来事の背景や結果だけでなく、その出来事が人類に及ぼした惨禍や、平和の尊さを深く考えさせる視点を常に提供する。</p>	<p>インターネット上の情報などから、偏った見解や特定のイデオロギーに基づく記述が見られる生徒がいる。また、安易な結論に飛びついてしまう生徒がいる。</p>	<p>教員は、生徒のスライド内容や記述を丁寧に確認し、個別面談や Google スライドのプライベートコメント機能を活用して、「この記述の根拠となる資料はどれか?」「この出来事について、異なる立場の資料(例:被害者の声、他国の公文書など)を読み解いてみよう」「この選択がもたらした倫理的な影響について、どう考えるか」といった具体的な問いかけを行う。歴史的事実に基づき、多面的・多角的な資料を提示することで、生徒自身に思考の偏りに気</p>

		づかせ、批判的な視点から歴史を捉える力を育成する。必要に応じて、学習指導要領の目的に立ち返り、平和で民主的な社会の形成者としての歴史学習の意義を再確認させる。
--	--	---

◆進捗管理とモチベーション維持

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
Google スライドの共有機能や、探究ラボでの活動記録を通じて、生徒一人ひとりの学習進捗状況を可能な限りリアルタイムで把握する。	作業が進まない生徒や、モチベーションが低下し、学習意欲を失ってしまう生徒がいる。	定期的な巡回による声かけや、小さな達成を認め、褒めることで生徒の意欲を高める。また、必要に応じて、学習時間を区切り、次の活動へと促すなど、ペースメーカーとしての役割も果たす。

(2) 協働的な学びの充実

個別最適な学びによって深めた生徒一人ひとりの考察は、他者との対話や共有を通じて相互に知識を補完し合いながら、多面的・多角的なものへと深化する。本単元では、以下の手立てを通じて、生徒がそれぞれのペースで、かつ他者と協働しながら学びを深められるよう、柔軟な協働形態と、学習成果の相互参照を促進する。

◆協働形態の生徒による選択と自律的な学びの促進

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
第4時～第7時のスライド作成の活動において、生徒自身が最も効果的に探究を進められるよう、個別での探究、またはペアや少人数グループでの協働を自由に選択できる環境を整える。この選択は、生徒が自身の学習スタイルや状況を客観的に見つけ、最適な学び方を模索する機会となる。	一人で進めることに戸惑いや困難を感じる生徒や、協働形態を選択したものの、効果的な進め方を見つけられず停滞するグループが見られる。	教員は、生徒の状況を把握しつつも、安易に学習形態を指示するのではなく、生徒が自らの学習状況を客観的に振り返る機会を重視する。具体的には、授業の節目や終わりに、「今日の学習において、あなたは最適な学び方を選択できましたか?」「もしもう一度やり直すなら、どんな学習形態で進めたいですか?」といった問いを含む振り返りシートを効果的に活用させる。これにより、生徒自身が自身の学習方法について考察し、自律的に次回の学習活動や、今後の探究活動に生かしていく力を育成する。

◆学習成果の相互参照と知識・理解の相互補完

教師側の準備や支援	起こりうる現象	教師の対応
<p>第4時～第7時で作成した個々人の Google スライド（またはグループのスライド）は、第7時において、スプレッドシートで URL を一覧化し、生徒間で相互に参照できるようにする。この環境は、生徒が他者の学習成果に能動的に触れる機会を創出し、特に自身では調べきれなかった情報や、理解が不十分だった概念を、他者の考察から補完することを可能にする。</p>	<p>スライド作成が時間内に完了しない生徒や、調べた内容が不足している、考察が不十分だと感じる生徒がいる。</p>	<p>生徒は、優れた仲間の考察を読み解くことで、未完成な部分を埋めたり、複雑な事象への理解を深めたりできる。特に、最終的に「どの現象が歴史的な転換点だったのか」を選択し、その理由を語るという本活動のゴールにおいて、自力でのスライド作成が苦手な生徒も、他者の学びから得た知識・理解を土台として、自身の考察を深め、最終的な「転換点」の選択に至るための足がかりを得ることができるよう支援する。単に模倣するだけでなく、「友達のスライドを見て、どんな気づきがあった？」「その考えに対して、あなたはどのくらい深めたい？」といった発問を通じて、単なる知識の補充に終わらない、批判的・発展的な学びを促す。この際、他者からの学びを、いかに自己の考察に統合し、独自の解釈として表現できたかという点を重視して評価する。</p>

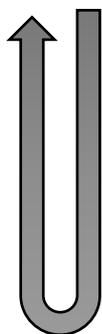
## 6 評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治外交の動きや欧米諸国の動きなどを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解している。	近代における共存から対立への転換点や近代の時代的特色について、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現している。	近代の時代的特色を、近代における共存から対立への転換点に関する複数の考えを比較・検討しながら、主体的に追究しようとしている。

## 7 問いの構造図

### 【単元を貫く問い】

大日本帝国の行く末を辿る ～二度の大戦から私たちは何を学ぶのか～



### 【第一次の問い】

第二次世界大戦や太平洋戦争において、日本はどのような結末を迎えたのだろうか

### 【第二次の問い】

なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのだろうか

### 【第三次の問い】

近代の時代的特徴は何だろう

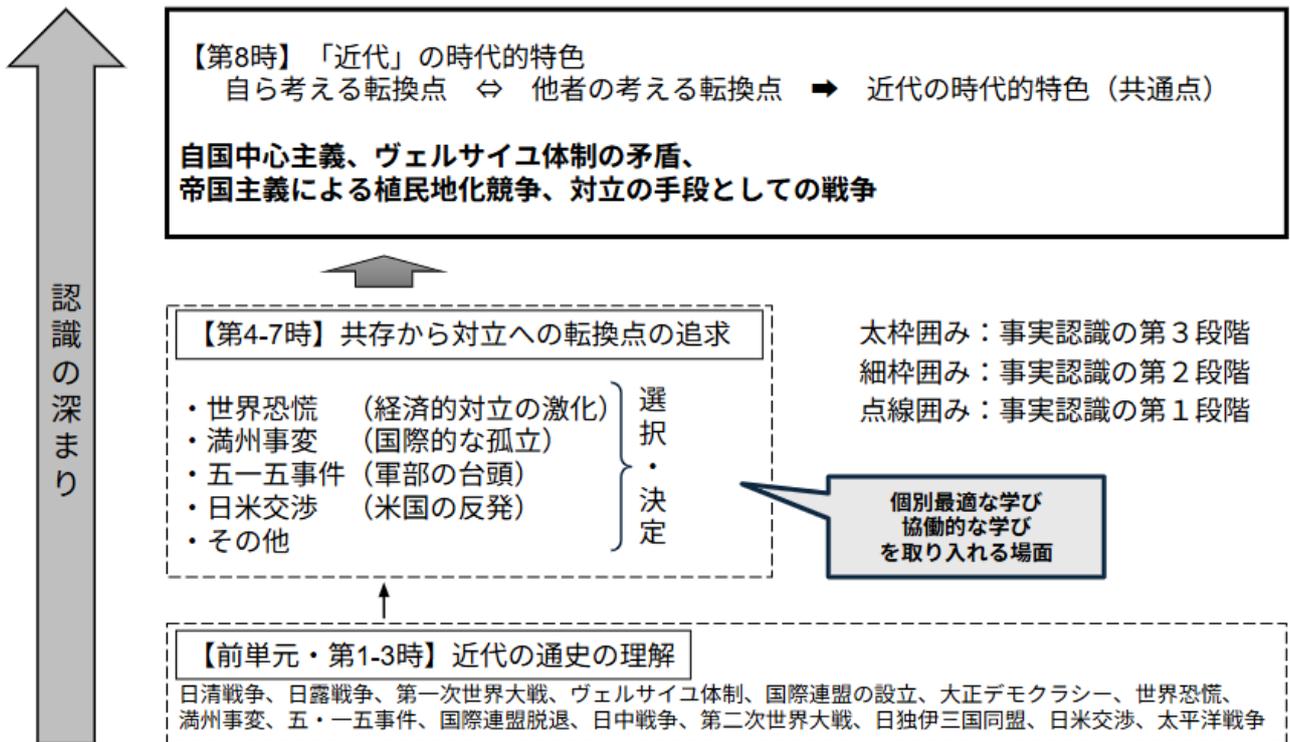
8 指導と評価の計画（8時間扱い）

（○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善に用いる評価」）

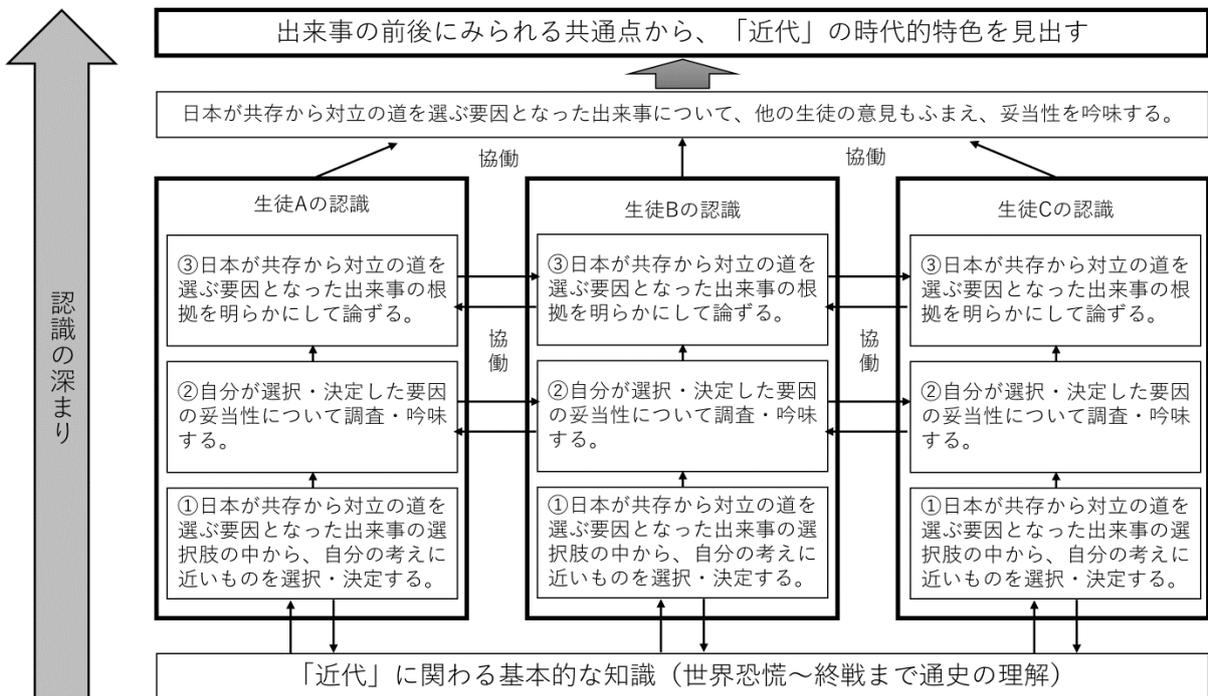
	ねらい・学習活動等（★ギガタブ活用）	知	思	態	評価基準〔評価方法〕
第一次 3時間	〔第一次のねらい〕 第一次世界大戦以降に起きた出来事についての知識の理解に努め、図表を用いながら、整理させる。 〔第一次の問い〕 第二次世界大戦や太平洋戦争において、日本はどのような結末を迎えたのか ねええ				
	1時 第二次世界大戦はなぜ起こり、世界と日本にどのような影響を与えたのか	○			昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治外交の動きや欧米諸国の動きなどを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解している。（知識・技能）〔ワークシート〕
	2時 昭和の時代に入り、日本の政党政治はどのような危機を迎えていたのか	○			
	3時 経済情勢が変化する中、日本はどのようにして日中戦争に突入したのか	○			
<b>【単元を貫く問い】</b> 大日本帝国の行く末を辿る ～二度の大戦から私たちは何を学ぶのか～					
第二次 4時間	〔第二次のねらい〕 共存から対立の道へと進んだ転換点を、時代背景を理解しながら探ることで、現代社会における平和の尊さ、国際協調の重要性などを再認識させる 〔第二次の問い〕 なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至				
	4～6時（本時） ・世界恐慌（経済的対立の激化） ・満州事変（国際的な孤立） ・五一五事件（軍部の台頭） ・日米交渉（外交の決裂） 選 択 決 定 →★4つの転換点候補の背景をまとめ、Googleスライドを作成 7時 ★スライドの発表、共有 →自分の中の最適解を見出す。	○	○		近代における共存から対立への転換点や近代の時代的特色について、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現している。（思考・判断・表現）〔Googleスライド〕
		○	●		

第 三 次	<p>〔第三次のねらい〕 第一次、第二次の学習から、近代の時代的特徴を理解する。          〔第三次の問い〕 近代の時代的特徴は何だろう</p>			
	1 時 間	<p>8時          近代の時代的特徴を明らかにし、私たちがにど          の大戦から学び、生かしていくべきことは何だ          ろう。          ★Google classroom にて提出。</p>		<p>● ○ 近代の時代的特色を、近代にお          ける共存から対立への転換点に          関する複数の考えを比較・検討          しながら、主体的に追究しよう          としている。（主体的に学習に          取り組む態度）〔ワークシー          ト〕</p>

9 思考の深化に対応した単元の指導計画



参考 単元における学習の個性化・協働的な学びのイメージ図



参考資料：千葉大学教育学部附属中学校(2024)

「個別最適な学びを取り入れた社会科授業の在り方～学習の個性化による社会認識の深化に着目して～」

## 10 学習展開

### (1) 本時の目標

- ・ 近代の日本が共存から対立の道を選ぶ要因となった転換点を探る中で、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現している。(思考力、判断力、表現力等)
- ・ 共存から対立の道へと進んだ転換点を、時代背景を理解しながら探ることで、現代社会における平和の尊さ、国際協調の重要性などを主体的に追究しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

### (2) 本時の展開

時配	学習内容と活動	留意点 (▼) および評価 (○)
導入 5分	<p>◆前時までの活動内容を振り返る。</p> <p>「なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのだろう」 →自分の考えを Google スライドにまとめる。以下の4つの出来事のいずれかを選択し、その出来事が起きた背景や結果を調べた上で、考えの根拠に含める</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 世界恐慌 (経済的対立の激化)</li> <li>2 満州事変 (国際的な孤立)</li> <li>3 五一五事件 (軍部の台頭)</li> <li>4 日米交渉 (外交の決裂)</li> </ol> <p>◆本時の学習活動について把握する。</p>	▼選択肢に「その他」も可能にする。
なぜ日本は国際協調の道を歩むことができず、世界大戦という悲劇へと至ってしまったのだろう		
展開 10分  20分  10分	<p>◆選択した出来事について、背景や結果を踏まえ、選んだ理由をまとめる。(前時の続き) 【個別最適な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時までの学習をもとに、個人の考えとその根拠を Google スライドにまとめる。</li> <li>・ 教師からの個別アドバイスを読み、修正、追究を進める。</li> </ul> <p>◆自らの意見を他者と共有し、自分の考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他者の意見を聞き、自分が調べていないことを聞くことで、別の視点からの理解を深める。</li> </ul> <p>◆現段階における自らの最適解をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自らが考える転換点とその理由を明確に表現する。</li> </ul>	<p>▼前時までの活動で作成した生徒個人の Google スライドを点検し、授業者からのアドバイスをギガタブから送信する</p> <p>▼うまくスライド作成を進められない生徒には、個別に相談し、適宜助言や資料の提示を行う</p> <p>○近代における共存から対立への転換点や近代の時代的特色について、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現している (思考・判断・表現) [Google スライド]</p>

	・ 主観ではなく、事実から考察できることをまとめる	
まとめ 5分	◆振り返りシートの記入 ◆終わり次第、スライドの作成及び修正	▼自らが選択した出来事と変わっていてもよい。また、質問があれば、複数の選択肢があってもよい ○共存から対立の道へと進んだ転換点を、時代背景を理解しながら探ることで、現代社会における平和の尊さ、国際協調の重要性などを主体的に追究しようとしている (学びに向かう力、人間性等)

### (3) 本時の評価

- ・ 近代の日本が共存から対立の道を選ぶ要因となった転換点を探る中で、近代の日本と世界を大観して、多面的・多角的に考察し、表現していたか。(思考・判断・表現)
- ・ 共存から対立の道へと進んだ転換点を、時代背景を理解しながら探ることで、現代社会における平和の尊さ、国際協調の重要性などを主体的に追究しようとしていたか。(主体的に取り組む態度)